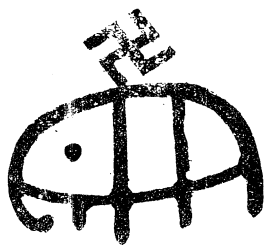


田舎芝居

分七寸三	コ	ヨ	紙	表
分二寸五	テ	タ		
寸	コ	ヨ	粹	文
分三寸四	テ	タ	本	

何れも吉葉



いざうまうい
黒屋居
 八人續

作者
 一乃象亭



井杖の空
 表座す万倍
 夕日合ふる上

もんめ
黒屋居
 衛門

東西しやうせいくく。暫しん。
ふんかんしやうてん。夫そ。珍ちん。
てい。昔むかし。黄わう。
てい。帝きの御ぎ宇うかと
よ。鳳ほう凰わう出でて
さうふん。東とう園えんに來らい儀ぎ
す。豐ほう年ねん時ときに
あた。大だい當たうり。田でん舍しゃ
ひやく。芝し居く始しりて。
ひやく。姓せい等とう遊ゆう
らく。樂らくす。その古こ
事を其その儘ままに。
ど。つさり居いた
だい。大だい名めい題だい。爲ため先せんッ
は。つ春はるの序じよ

東とう園えん。暫しん。
ふんかんしやうてん。夫そ。珍ちん。
てい。昔むかし。黄わう。
てい。帝きの御ぎ宇うかと
よ。鳳ほう凰わう出でて
さうふん。東とう園えんに來らい儀ぎ
す。豐ほう年ねん時ときに
あた。大だい當たうり。田でん舍しゃ
ひやく。芝し居く始しりて。
ひやく。姓せい等とう遊ゆう
らく。樂らくす。その古こ
事を其その儘ままに。
ど。つさり居いた
だい。大だい名めい題だい。爲ため先せんッ
は。つ春はるの序じよ

東園一

ひらき 恵方に
 開に。 恵方に
 むかひ 向て書き初
 の。 万硯は近
 江の虎斑石。
 爲持たる 椎の
 實三文筆。曾
 我兄弟のせり
 ふまで。 万工
 藤はあらずさ
 らくと。 ひ
 つかく 猿隈小
 林の。 朝日に
 羽をのす 鶴屋
 が板。 爲齡は
 千代の竹杖
 が。 師匠自慢

大名歌。 先づ書きの序。 開き。 恵方に
 向て書き初。 万硯は近江の虎斑石。
 爲持たる 椎の 實三文筆。 曾我兄弟のせり
 ふまで。 万工藤はあらずさらくと。 ひ
 つかく 猿隈小林の。 朝日に羽をのす
 鶴屋が板。 爲齡は千代の竹杖が。 師匠自慢

の鼻の先き。

万高い山から
谷底見れば。

お萬にあらぬ
百倍が。同じ

息勢はる
霞のひみきの

引き幕切り幕
を。爲あくる

岩戸の一番
目。万五ばん

續の一チから
十迄。二人評

判頼上まする
とホ、

うやつてもふす
敬。白。

師匠の鼻のえき山一
座ろねむもあまの想万倍
目トく是れもあまの想万倍
の引幕切幕もあまの想万倍
れ一當目。あまの想万倍
十と三人は判頼上まする敬白

お入内 二

序

先^{さき}に遊^{ゆう}子^し法^{はう}言^{げん}辰^{たつ}
巳^みの園^{その}の二書^{ふた}出^でて
より。年^{とし}々^ざ歳^{さい}々^ざ
其^か糲^す粕^{はく}を吸^すつて。
似^にたり寄^よつたり^の
晒^{しやれ}落^{はん}本^{ごま}。斗^と升^{しやう}を以^{もつ}
ッて量^{はかり}るとも量^{はかり}り
盡^きすべくもあら
ず。其^{その}洒^{しや}落^れ本^{ほん}を閱^{くわん}
するに。底^{そこ}の底^{そこ}を
穿^{うが}んと欲^{ほつ}して。八
万^{はち}奈^な落^れの汚^ご泥^{どろ}を
堀^くり出^だし。隅^{ぐま}の隅^{ぐま}
を探^{さが}さんと欲^{ほつ}し

序
先^{さき}に遊^{ゆう}子^し法^{はう}言^{げん}辰^{たつ}
巳^みの園^{その}の二書^{ふた}出^でて
より。年^{とし}々^ざ歳^{さい}々^ざ
其^か糲^す粕^{はく}を吸^すつて。
似^にたり寄^よつたり^の
晒^{しやれ}落^{はん}本^{ごま}。斗^と升^{しやう}を以^{もつ}
ッて量^{はかり}るとも量^{はかり}り
盡^きすべくもあら
ず。其^{その}洒^{しや}落^れ本^{ほん}を閱^{くわん}
するに。底^{そこ}の底^{そこ}を
穿^{うが}んと欲^{ほつ}して。八
万^{はち}奈^な落^れの汚^ご泥^{どろ}を
堀^くり出^だし。隅^{ぐま}の隅^{ぐま}
を探^{さが}さんと欲^{ほつ}し

て。六万坪の塵芥ちんがいを掻出し。見ぬ事み清しの影穿せんさく鑿さく。くら闇やみの事をあか
るみへ持出され
て。媚じょうろけい妓いの身
の上には迷惑みづくに及
ふ事み少なからず。
是見みに興きやうなく見ら
るゝに害がいあり。實
に笑を取しつに失し
て。苦にが笑わらひを惹出ひき
すに至らしむ。是
をや。過たるはな
ほ及はさるが如し

を搔ささんど欲ほちて。六万坪の塵芥ちんがいを掻
出し。見ぬ事み清しの影穿せんさく鑿さく。くら闇
の事をあかみるみへ持出され
て。媚じょうろけい妓いの身
の上には迷惑みづくに及
ふ事み少なからず。
是見みに興きやうなく見ら
るゝに害がいあり。實
に笑を取しつに失し
て。苦にが笑わらひを惹出ひき
すに至らしむ。是
をや。過たるはな
ほ及はさるが如し

とやいはん。予か
 兄弟子の万象亭謂
 事あり。凡稗官
 を編に一つの書法
 あり。能く近く譬
 をとらば立役眞
 劍を抜いて實に敵
 役の頭を刎。やつ
 し女形をとらへて
 前をまくりはだえ
 をあらはにしてゑ
 ならぬ事を仕出
 し。道外禪をはづ
 して舉丸を振り廻
 さば。目を驚かし

の万象亭謂事あり。凡稗官を編
 つの書法あり。能く近く譬
 をとらば立役眞劍を抜いて實に敵
 役の頭を刎。やつし女形をとらへて
 前をまくりはだえをあらはにしてゑ
 ならぬ事を仕出し。道外禪をはづ
 して舉丸を振り廻さば。目を驚かし

片腹を拘ゆべけれ
と。正の物を正で
御目に懸ずして。
しかも正の物の如
く見するを上手の
藝と云つべし。
戯作も亦然り。實
を以て實を記すは
實錄なり。虚を以
て實の如く書成は
戯作なり。洒落本
の洒落を見て洒落
る洒落は洒落た所
が洒落にもなら
ねば。只可笑を

をいふ——て、是れも正の物の如く見する
所と云ふの藝と云ふべし。戯作も亦然り
實を以て實を記すは實錄なり。虚を以
て實の如く書成は戯作なり。洒落本の
洒落を見て洒落る洒落は洒落た所が
洒落にもならねば。只可笑をいふは
只可笑なり。出づる小冊

專とすべしと。
此語戯作道の確
論といふべし。此
頃万象亭書捨の小
冊あり。晒落本に
あらずして野夫本
なり。其筆先の穿
所は。生得田舎の
芋頭にして。是
を讀是を味はゆれ
ば。忽然として屁
を催ほす。放る所
の屁高鳴して聞
人の耳を驚かし
め。大となく小と

り。晒落本にあらざりて野夫本なり。
其筆先の穿所。生得田舎の芋頭
にして。是は讀是を味はゆれば。忽
然として。屁を催ほす。放る所の
屁高鳴して。聞人の耳を驚かし
め。大となく小となく。一美を
容せしむるなり。倘鼻を搦こ

なく男となく女と
おこかひこき
 なく。顔を解腹を
だかえ
 捧て一ツ笑を發せ
はつ
 すといふとなし。
もしつま
 倘鼻を撮み袖を覆
おほ
 ふて。糞の如しと
くそ
 いふ人ありとも。
 そこは万象平氣な
 ものなり。
 天明七年末のは
 つはる 風來山
 人門生無名子
 神田の寓居に棲
やせりふら
 つく
 遅暇 久し振に
ぶり
 て筆を採
と。

袖を覆おふく。糞くその如し。人
 門生無名子。久し振に筆を採
 たり。

天明七年末に
 風來山人門生無名子
 神田の寓居に棲
 久し振に筆を採

田舎芝居

万象亭著

○序 開

越後の國は寒國にて降積雪の高入道。みこし路の一にして夏さり來ば首筋も。縮の帷子臺をわする。田休の畔道を。ふら／＼行者者は。大沼郡。妻有の郷。南鑛坂村の百姓與五七。立浪に水車を染出したる。手織木綿の單物。花色太織の厚肌たる帶を飄單ぐびりに引纏。髪は先年はやりたる。疫病本田に癩眉。江戸土産に貰つた自慢に。天鷲絨の龜の甲の附た腹懸を見せ懸。更紗團扇をさしかざし。山挽の丁駄をから付せながら。貴殿さア殿さ每晚きやアレぞんきかなうてもいとし。しめて寐た夜は猶いとし。とのこうといな。

と小唄まじく行跡より。北鑛坂村の勘太郎といふ若者。縮織の婦をちよろまかして拵たる。柿縞の大極無類といふ縮の浴衣に。去とは不釣合なる黒棧留の帶を猫じやらしに結び。五十三次の駄賃附を拵たる油扇をかざし。草履下駄を引づりて來懸りしが。夫と見るより。勘太與五七どこへいく。しばやだら同士にいくべい。と呼籲られ。勘太か。おらアはや先へいんだんべいと思つたア。さあ／＼一所にいくべい。何でもはや今度はないたわたりやア。去年の籠明に來たよりやア。大入だア。はなれたとはじめた事。わたりとはわたり芝居とならして。家／＼に見世をひらき。縮市とて縮の賣買あり此時分は江戸よりも商人入込で殊の外賑やかなり。その節は。勘太其筈でもあんべ

いさ。新方の山下作兵衛が座本で。櫻川豊太郎だアの松本濱次良だアといふせうよたらが來たからいづはづだア。けふは何のうしるな。醬油樽とはすぐれていふ。何の事か。勘太よんべ太鞍が廻つて。今日なア豊年踊會我田植といふ江戸狂言だげだア。勘太おらア早九日目だアから。忠臣藏だんべいと思つたア。田舎芝居の九日目は。勘太そりやアおぶちやつて。うちすていと。小泉の太左衛門のお袋が。どうかしられたじやアなかつてかの。勘太ヲウものしけ。あるべいこつた聞つせ。此頃の晩景あのお袋が。刻昆布のうこしらつて喰ふとつて。年の氣で目のわりく成つた上に。暗紛のこんではあり。刻煙草と取違へて。三年垂へぶち込でしよつからく煮たやつのお。三年たれとは醬油の事。しよつかめしらくとははからくといふ事。飯の菜に頬張て。がら／＼かん飲んだアから。咽

居芝會田

中へ脂がこびり付いて。落すべいしかく
かねエから。只はア目眼のうさつくり
返して。ぎつくりしやつくりしてべへ居
るから。太左衛門もお方も。あんとは
べへあんとはべへと方角のう失つたア
よ。おかたとは女。奥五 そりやアは珍事
ちらやうだつけなア。夫からどう仕
けな。御太そこへおらが親仁殿が逝合せ
てコレ太左衛門どの。こかア動天しる所
じやアござんねへ。おらが隣の大津傳
龍様を頼んだが。能くござると云はれ
たら。何がア千手町の馬市に。伯樂殿
の中糞で。壹分五百で買つた枳栗毛の馬
に。郷士殿から借寄せて。置鞍のう懸て
迎に遣たら。そんな傳龍様が。わつらわ
しと乗付さした。何でもはア傳龍様
は御功者だア。御醫者の八宗兼學だア。
こりやアへへへろの脂のう管たアと
違つて。五臟六腑といふ腸のうさん出
いて。酒ぎ洗濯なアなるめへ。爰がは

い頓智發明八算見一の入る所だ
アといはれて。暫く考て居ら
れけが。何のう思はれたか。お
藏半紙のはな帯のう取出いて。
破ては捻り／＼。くわんせんよ
りのうこしらつて。お袋の口の
へし割て。そのよりのうおしこ
まれたア。奥五 夫からどふ仕
けな。御太 サアその跡のう聞つせ
へ。其よりこんだくわんせんよ
りが。しんならへ抜出いたは。
夫から尻のうばつ立させて。づ
る／＼と手繰出いたら。咽首に
こびり付た煙草の脂が皆とれ
て本腹のうしられたア。なら程
醫者殿の居ない村には住ないも
のだアといふが。おらなんだが
親仁殿なんだア仕合せで。生薬
師の傳龍様の隣に居られるお蔭
で。疝氣の虫の根絶しのうしら



れたア。奥五そりやアへお袋なア半死

半生の目に逢れたな。そしてあの傳龍

様の娘のおじどなアどうしられた

な。勘太おじどなア茂作と色事よ。翁ぞ

ろへの日にも。初日の。しや敷へ来て居

られたら。向しやじきに茂作めが来て

居て。こつちから手まねぎをすれば。あ

つちからははつくりを仕懸て。ねこし

やめ踊の最中に。二人ながらどこへか

おつばづしたつきやア。よくたんだへ

てきやア。去年の盆躍の時から知

音だけだア。奥五そりやアへとんだア

こんだア。しかしはやきものやけたアこ

んだ。トむつとした顔は。こいつおき

んだら。にしも氣があるか。奥五あには

ア。さうでもねへけんど。トはなしもつてゆ

ちかく成つてくると。見物はとろ

く田舎娘子どもの手を引立て。見物アレ芝

居かはねへたげてでへこが。してれこ

／＼と鳴はへ。早くあいべエ。見物はや

くいがじやア。い、棧敷がふさがるべ

い。三人おらもいそいでいくべへ。

〇二立目

抑田舎芝居の構といつば。薦垂にて

四方をかこみ。栗丸太を縄ゆひにした

る鼠木戸。看板は松板に役者の名を書

付たるを打付。狂言名代は紙幟に書

るを押立て。此のぼり前のばんに太鼓をまは

のをすぐに木。太鼓櫓は木戸の際へ高く組

上。座元の紋所丸の内に三笹龍膽の幕

をはりて。間拔千万なるしやきりを打

その下に札場あり。頭といふは近在近

郷名を知られたる通り者。切竹を染た

る伊達浴衣に。虎班を打たるもんばの

帯。郡内縞の褌を見せかけ。薬研鐙の

長刀をばつこみ。錢ばこに褌を敷てむ

んづと居懸り。傍を睨で叩へたり。木

戸番はちくはぐに。思ひ／＼の半点を

着し。結綿と三舛の紋を。胡粉にてべ

つたり書たる。茜木綿の投頭巾。揃へ

と見えて一とろに引かぶり。木戸番ヤ

はねへるは／＼。此まがが對面だア。

石橋の角兵衛獅子だア。今つからお仕

廻のふち拔込たんだ百だア。安いもん

だア。見ば早く這入て見さししやりま

しやう。仕懸の事は大。見物コレ元ペど

の。一ばんしやじきはいくらし申な。

かしら一番しやじきが八百。二番棧敷が

七百。三番棧敷が六百。並棧敷が五

百。土しやじきが百づ／＼もし。つちしやじ

のと。見物そりやアへへに高くござ

る。そんだら並しやじきを三百に負な

さろ。頭負るの。へすのといふは。只

のわたりのこんだア。關東八十八櫓の

てつべんといふ芝居だアから。一もん

だれ。二文だれねざりこざりはござん

ねへ。見物そんだら弁當の運上は風な

さろ。頭いつせへ。いんやといふ。辨當が

一組で二百。酒が一舛で七拾貳文ツ、

の運上は。わたり芝居の式目だ。したがはい。モウ聲切りになつたこんだア。まけてやりませう。サア割印のう持ていがつせへ。ト木戸札さけ弁とちの割印をわいざ様。つのかくしをかぶる。あとも来るは六十あまりの數袋から錢をぬり出しな。薬コレお頭どのよ。冥加錢なこへさん出し申た。其お札のういなかせてくれさつしやりましよ。回舍囃わしは此頃毎日つゞけて來た噺でござりもす。けふははや札錢のしがくがござんねへから。御ていどのに隠して。引割のう貳舛たらす持て來もした。是で土棧敷へいれてくれさつしやるべいら。忝くござります。頭こりやアへ仕づら相談だアが。毎日來めさるこんだ。サア札のう持ていがつせへ。ト引わりと取替る。其外あまた木戸日興五七期太も来る。是はと興五。親方どふらくもゆ。頭も知たかほなり。親太。親方どの。けふもはいでかく盛ます。頭なんとしてかおそくござる。今がてうどこりだア。こびりとは。此まてで櫻川豐次

郎殿をはめてくれさつせへ。三人響へいとおもつてゑさわさいふ事。來もした。木戸番どの大義でござります。ト云ながら木戸をはいらうとするを引留め。月番コレ待なさろ。ふだ錢のうよござさつしやい。かはかし。おらは山屋むらから來たのだア。ト云ながらはい。木戸。なんぼ隣村のわかいしよでも。神事芝居たア違ひ申す。しいなはなり申さない。トや合。いもの三三人來懸り。ツレ惣六じやアねへか。何のうやじり合ッのだ。かはかし。何だア角だアのしやべちやアござんねへ。おれが木戸を這入るべいといふ事もし。夫を錢の出さしやアいれまいといふから。おこつたもんちやくたア。ツレそんだらいいは。コレ元ベどの。去年の出來秋に。おらが村へわたりの來た時。この村かたから來めされたわかいしよは。おらが木戸ばんのうして居たが。皆な只入ししたは。こかア

いみたがひだア。やさくさいふとはござんねへ。通しなさろ。頭わり様たちやアはい。こつちの水帳にない事をいふ人たちだア。去年そつちの村方の芝居のときやア。おらが村方から薦張の簀を百枚。杉皮のう百把。積物にしたから。夫ではい只見物のう仕たのだア。今度こちらの芝居にやア。一文げが物もよこさないで。見物なアたゞ仕べいか。そりやア成申すまい。油虫だら礮帛へ付めさろ。かはかし。ならじやアならぬでよくござるは。油虫と云れては。一分がたち申さない。ツレ。一分所じやアござんねへ。二分も三分も立申さない。通せるとがならじやア。かふして通り申すは。ト云さま木戸をやぶれども。元メ少しもさわがずしにかけたる拍子木をはづしはやひやうしきをうてば。かねて相圖のふせきと見へ。村はづれの。とも竹やりにて。おつと。外の村ではたくとはあての横槌がちがひ申すぞ。はれたる事。だ

まつていがじやア。おらが相手に成て
突留申すぞ。ト雖ふすまにて取まかれりすが
のあはれものぐんにやり。
サアはやくいがつせへ。かはかしいぐめ
たアやねへは。コレ元々どの。きつとや

げへしをもつて来もすぞ。頭ヲ、持て
来めされば。やだアとは云申さない。
おしやらくの長介だア。よくつらのう
見知ていくがい。トひげのみあけて大平
らくは。何かたも同じ
いきま

かかしチコ一期わすれ申さない。よく
見知申た。いいがじやア突留申す
ぞ。かわかしいぎ申は。いいがつせへ。

ト村さかいへおくり出す。木月モウ喧嘩は済
申たア。今ツから晩景まで百だア。

〇三立目

芝居の内は開扇ひきあきあふを見るぞく。舞臺を
以て要とし。先廣に棧敷をかけ。舞臺
の上と棧敷の上ばかり。杉皮にて屋根
を葺。落間おちまの上は青天井あはてんせい。切落きりの處ところに。
大木立樹ぬんぬつと生てゐる。棧

敷は何れも中二階にて。間イの仕切は簾
を懸。前の手摺は新川の前垂の如くな
りたる。花毛氈を懸たるが。代官殿の
役棧敷。引つゞいて文字入の打敷を懸
たるが旦那寺の棧敷。其次に机懸の破
れ毛せんを掛たるが醫者殿の棧敷。夫
より外は花菱氈。澁紙。大風呂敷なん
どを懸しもあり。花道は土にて築立。
兩方へ芝を敷。瞿麥姫百合をあしらひ
て植付。扱引幕は色いりにて。地獄極
樂の蘇想を染抜たるは。中條姫のお曼
陀羅とも云つべし。見物どれこびりの
間にばりのうこいて来べい。○おらア
はこひのうぶんぬくべい。○おらア
はこひのうぶんぬくべい。ト居たり立た
り。中う
り。木月番の如くあかね染のなげ頭
も。かわごのふたへくひ物をいれ。

しこめや。あめん棒や。○麥湯
や。ふつたおれ餅や。○麥湯
種團子やもちこし團子。○濁り酒や。
あま酒や。○握り飯や。○米の飯の
握りめしや。本の飯のにぎり飯や。

見物コレくこへひるだんごのうくれ
さつせへ。○おれにはあめんぼうのう
呉さつせへ。ト船を買。江戸のあめとはちがひ
田舎にては。もみぬかにてつめ
てあるゆへ。まつ黒なつめ
てこそおとしてくふ。

い見物だア。地頭屋敷へ強訴の來たや
うだアはい。あくとかさりますすべい。
よろさつしやりましよ。とすはる。
あくとはか。奥五一番しやじきが代官ど
の。二番しやじきが等行寺様。三ばん
しやじきが傳龍様だア。しかもおさじ
どもの來て居られらア。代官様とおて
ら様とお医しや様ははや。どこでも威
光が強いは。角力も芝居も錢なしだア。
ト二人はそこらつぎきなど見まはしてゐる。
向ふの方にて何かこころの聲がする。

又六は孫作。さつきから百万陀羅いふ
こんだア。なんば札を先へ取てはいつ
ても。お身はおれが尻へ付べき筈だ。
跡へさがつて見物のう仕めさろ。孫作
又六どの。そんな機車はやねへ物でお
んじやる。又六無理も非道もござんね

へ。お身が家筋は。おらが曾祖父殿の代に。普代女郎のづばらんだ庭子だアから。おらが先へたつべきはづしやアござるめへぞ。〔兩作〕亦六殿。わり様も地面の見て物なア云なさろ。大飯振舞の座席たア違い申す。遊所で席論なア入申さない。先へ這入たものが先に居べき筈でござらアよ。こかア惡所でござりもす。〔又六〕あく所も灰小屋も入申さない。此南鎧坂の村中では指折の又六だア。等行寺様の正月参りにも。おらが箸をとらない内は。名のし殿でも。庄屋どのでも。一番汁粉の親枕の蓋のう。だれも明る事は成り申さない。代々大姉代と居士の家柄だア。〔兩作〕代々大姉九年母大姉でもとんちやかアござんねへ。そりやアへへ。場所と所に依たらいへ柄も入申べい。今も云通りこかア遊所だア。遠くて見づらくは。早く來て前の方へ這入たがよくござるは。

〔又六〕夫をおどれにならうべいか。〔兩作〕知じやア教ますべい。ト二人とも聲高になあけて口上。〔口上〕東西／＼さアて。此所に置まして當村他村から役者色子へ下さつた。積物のかき付のう讀上ます。しづかにしておき／＼やりもし。東西／＼。トいへば機敷も落間。當村方彌平次様團兵衛もひつそりとなる。當村方彌平次様團兵衛様を錢廿四文。倉橋熊吉へ下さる。是で酒でも吞とつてへ。此とつてへをなが小泉村のお噂様方より。ぼた餅一じきりやう手作の醃一とつくり。惣役者ども色子共へ下さる。よつばら飲喰て働けとつてへ。よつばらとはしたすがた村吉藏様の御隠居様より。絹紅二三尺。内山金三郎へ下さる。越中櫛にでも仕りとつてへ。同溫鈍の粉一袋。櫻川豐次郎へ下さる。是を顔をぬれとつてへ。小泉村。稻葉村。山屋村。鉢村。千手町。右五ヶ村のわかいしよ様方より。麥一トかます。茄一ト龍。かばちや十。玉味

噲五懸。葉煙草三斤。竹川三郎右衛門へ下さる。随分かせいで働けとつてへ。當むら等行寺の和尚様。線香五把。五種香一袋。松本濱次郎へ下さる。衣裳母衣着をふすべろとつてへ。はろぎとかけの同大海傳龍様より。枇杷葉湯百服。暑氣に當た役者どもにふり出してのめとつてへ。同お娘子様。花紋りの手拭一ひす。櫻川豐次郎松本濱次郎へ下さる。是をかぶつてじよなめけとつてへ。山屋むら高井浦之介様より。酒一樽縮一端銀一對。森山平介へ下さる。すいぶんかせへでぎしめけとつてへ。同村わかいしよ様かた。寒生菱一袋。黒砂糖二員。哥唄の富士田久兵衛に下さる。是をねぶつてうたへとつてへ。この外にいな／＼かさつせへた物は。又跡で讀立ますべい。もはやこびりも濟ましたから。押付曾我兄弟對面のきやう言のうはないます。左様におもわ

つしやりましよ。東西／＼。

○四立目

代官殿は高宮縞の帷子に紺生絹の羽織。木欄色の野袴。しやちこばつて居られしが、隣棧敷の等行寺の和尚と咄をする。〔内宣〕時に和尚さま。けふの狂言も面白ふござりました。拙者も若い時分は至て放蕩で。所々方々遍歴致して。旅芝居をも見物致したが。銚子の浦方の芝居では。何の狂言でも。大切に張子の赤鬼を出さねば見物が立ませぬ。仙臺の釈迦堂などの芝居は。見廻りの役人が參ると。樂屋から居合拔の形に拵た役者が出て。やつとふ／＼のしなへ打と申て。居合をぬく眞似をするので。藥賣の体に成ます。又三人芝居といふは役者三人切の云立でござるから。舞臺へ役者が三人から上並ぶ時は。せりふの廻て來ぬ役者は。小さな

屏風を膝の前へ立て置ます。又女形は女形の面。立役は立役の面を腰へぶらさげて。人形芝居の体に成て居るものもござりますて。〔和宣〕はてなし。此村方ではそんな法度がなくつてよくござります。そしてあの幕をお見やりもし。稻葉の紺屋の惣兵衛が染たげでござる。芝居の幕に地ごく極樂の体想とは。能思ひ付でござります。則是か狂言綺語も讃佛乘の縁でござります。と。咄のとなりは傳龍老。急病用でそこら迄ゆかれ。跡にのこるは娘のおじ。所名うての品ものにて。朱ぬりの櫛に焼付の銀。六齋市に買った匂ひ油をべた／＼とつけ。江戸の嬢子から貰た鬘差を曲もせず。にその儘で差。髪は鳶の巢のやふに掴みちらし。駄白粉をこて／＼と面をかぶつたそく粧。仙臺花の取立の紅を口から頬べたへぬり。かすり越後のふり袖に。根古や絹の小六

ぞめの帯を吉瀾結びにむすび。忍び男の茂さくが切落から目遣ひをして立て行ば。其儘合点して手水に立ふりにて。小便所へゆくも茂作もそこに待て居る。二人は小便桶の際にたゝすみ。〔おき〕おらアはやさきつから逢たくてやるせがなかつが。とつ様が付て居さつしやるから。拔べいやうがござるなんだアよ。〔内宣〕おらに逢たかんべい。小甚太節に咽う通り。さつさせう／＼秋の風だつべへ。とつんと何としてそんなしよちつぷりをさつしやります。わしがこなさアにいつあき申た。おらは一日も早く夫婦に成べいと思つて。戸隠様へ願のうかけたから。今年は生年で宵月の青梨が錦生に成て。見るたびにぐい／＼と睡を引かじりたけれど。それを辛抱するのは。立物だアからでござります。おらアそれ程心中をたてますはよ。トなみだ

そりやアいつわりでござんべ。そんだ
らなせせうよたろどもに手拭のうや
らした。大方豊次郎が濱二郎に氣が
あるだんべ。おきじヤレハありやアわ
しが分にして爺様がやつたのでござ
り申す。西いつせへ。さうじやアご
ざるめへ。トせり合うしに奥五七が
うか。おきじア、是尻のうしねる
はつめる。だれだかなと。横へし
やくつたたなつちり。振飛されて
ひよろ／＼。心得茂作が身をかわ
せば。小便桶へまつさかさま。お
七これば。西かまわすとござりもふ
し。

○五立目

口上東西／＼。さアて此所田植曾我豊
年踊對面の幕でござりもふす。左やう
に心得さつしやりませう。但是が切
きやうげんでござりもふす。チョン／＼。
舞臺正面松林を書落したる簾をか
け。大臣柱の方へそこらのいなり様

から借て來て真物の鳥居を縫つけ。
目付柱へ杉の皮を巻。真物の杉の枝
を取付。一たい鶴が岡八幡神前の
てい。後谷。黒彌五。海野紙でこし
へたる素袍。張子の立烏帽子。万歳
扇のおや骨を折懸て末廣にしたるを
持。宮神樂の心意氣なれど。何だか
つまらぬ鳴物にてまくあく。

後谷イヤコレ二人の衆。今日は此鶴が岡
八幡様へ。工藤左衛門介經殿が恵方參
をお仕やるでござる。その待うけの
うすべいと思つて。此後谷の荒次郎
さわさと。出はり申た。黒彌五此黒彌五
も其分別でござり申。海野おらもそう
でござる。時にはや工藤殿は遅い事
でござり申。大方朝飯の仕かけやう
が。おくれたアからでもござんべ。ト云
てい。内が。○梶原平三出はつたア。ふ。
三人アニ平三どのがお出やつたアとか。
○梶原平三出はつたア。まのもめんとて

とに。黒もめんのくすり頭巾山かたなをさし。く
へきせるにて。うしろ手をくみ。江戸なら太鼓
といふ所など。きつねつりのやうな相方になり。
花道の見へなく。ぶら／＼と本舞臺へ直る。

三人コリアヤ梶原どなア用もござるめへ
に。なじよにお參りを仕やり申た。梶
今日は此頃にないぬくといひ日だアか
ら。脊戸のめぐりを野良廻りのうする
とつて。ついぶら／＼と爰追來もした。
お稻荷殿にでもばかされたげでござ
る。そして又にしたちやアとつとさ
きり物のう着て。なじよにそこに居や
り申。後谷けふは工藤どのがお參りの
うめさるでござる。夫を待受るので
ござるはよ。まのうを見て。梶時に三
人の衆。向ふの方からしよなめきが來
ますはよ。三人ホンニのんし。ト皆の方
を見ると。べこ／＼三味せんの相方になり。ふ
田久兵衛さるの子だんのちをうたひ出すで。とら
少將柳にけまりにぶら／＼貝を染たるもめん衣裳。
いんさんさんさの帯をむすびさげおきじ殿が
らつた手ぬぐいをかぶり。朝比奈は鶴の丸をそめ
たる半てもめんづきんをかぶり。太鼓をたたきなが
ら。おたすけおどりの見へにて。すつとこどり。ご
らくおどり。小ぶないよ。こをおどりながら。本

ぶたいへ直り。とい覺兵衛師
子弓くとりやしよとすむ。

【見物ヤウ／＼櫻

川松本のせうよだろ。熊吉殿も太義で

おんじやる。トほめる内。興五七
勘太花道へあがり。

【興五東

西／＼。狂言半へ邪魔だつべへが。ち

くとんばかり讃申そう。豊次郎殿のい

としさは。天にたとへば星の数。山で

木の數草の數。七里が濱では砂の數。

召たる小袖の糸の數。五反畠の芥子の

數とハホ、敬てつん出るこんだ。【勘太

つゞいておら／＼も讃申そう。濱次郎殿

の形振は。立ば芍薬居れば牡丹。あり

く姿は百合の花。熊吉殿をも譽申。顯

さに煩さに生へた髭。いわば野に咲菫

の花よ。日なたばつこをめさるなら。

産毛屋鍋でおぬきやり申と。ホ、敬てぶ

んぬいた。六の外ひきついて五ッ
六あり。これを略ス。

アはやお助だアと思つたら。大儀の虎

化粧坂の少將。太鞍ぶちなア朝比奈か。

【夜黒海 コリヤア へへたまげたこんだア。

團げへに笑ひめさるな。けふは工藤殿

が惠方参りのうさつしやるから。對面

のうすべいとおもつて。曾我兄弟が出

はるげだ。夫のう聞かじつて。此二人

のおしやらくが達ししい用があるか

ら。逢せてくれろとせがむから同道の

うしたのだア。【國小林さアの云つしや

る通り。おらが知音の十郎さアに逢べ

いと思つて。少將さアと云合て人の眼

にたふないやうに。こんな形にむくれ

て來もふしたアよ。むくれるとは
やつす事。

虎さアの云つしやる通りだア。おんじい

たちよ。戀には身をやつせでござり申

ス。【國夫で別つたアよ。したがはい。曾

我兄弟なア貧乏神の申子だげて。會

にもお大くにもうとまれた青野良共

だア。正月御だアの。田うへ浴衣だア

のといふ物は。夢に見た事もない。三

百六十余かんにち。野良着のぼうた一

枚で。水ばなのうすり上る貧乏野良

に心中つくすは。悪い分別だア。なアわ

かいしよさうじやアござり申さぬか。

【後夫さもし。虎せう／＼には介つね殿

が氣が有げた。貧乏神なアおぶちやつ

て。工藤殿にねつれるが。沼垂の水糖

のうなれるより味いせんさくでござら

アよ。ぬつたりの水あめは
富國のめい物也。

【國だまりなさろ。曾我の貧

乏がお身達が厄害に成申か。人の七難

より我身の八難だ。お身たちが身代が

どれほどよくござる。【團なんぼたれが

身代がわりくつても。曾我兄弟には叶

ひ申さぬ。なせと云めさろ。兄弟にお

つ惚た虎少將も。尻押のうめさるお身

さまも其さまは何でござる。お助の

眞似のうしとは嘘だんべい。やつは

り本に錢のう貰つて兄弟にみつぐで

ござんべい。太鞍ぶちの朝比奈。お助踊

の虎せう／＼。こつちの村方は三年が

内法施留だア。脇の村へ通れ／＼。【虎少

小林様なア。あんな雜言のうつきます

はよ。肝が焼て成ましない／＼。トな

小林大はだぬ 朝げち／＼殿よ。お身様な

ア年に恥たがよくござる。何の意恨が

有て今のやうな雑言のうつきめされ

た。そしておらやとらせう／＼に。

い、名をつけて下さつて。忝くござ

る。礼なアこうして云ますべし。こぞ

三人取さへる。わいらも相手だア。まは

見へも何もなく本のつかみ合の如く也。虎ヤレ

ハア存分いふだら口でいふがよくござ

る。手を出したら負に成ますべし。せう

虎さアの云つしやる通りだア。虫の

うへさへておつこたへなさろ。朝アニ

ハア堪忍袋の緒がきれ申た。はなしめさ

ろ／＼。座少もつけない事がおこつたア。

だれぞ來て取さへてくれさつしやりま

しな。ト大座でがなり立ち。きりまくの内か

かみのかつら。火うち入の布子ばかり。

ト大座でがなり立ち。きりまくの内か

かみのかつら。火うち入の布子ばかり。

ト大座でがなり立ち。きりまくの内か

かみのかつら。火うち入の布子ばかり。

なく本がたいへへかけ。是あにいせく事はね

へ。此工藤左衛門がおつ留た。一番留

てくんさるなら。黍茄子の鴨焼だアも

さ。座すけつねどのが留さつせへても。

聞申さない。やだア／＼はなしなさろ。

工藤藤どの。い、所へ來て下さつた。

ちくどん斗りの間違ひではや。朝比奈

殿がはんげへのうおこされて。なじや

うにも仕べいやうがござらんんだア。

後黒海よく挨拶のうして呉さつしやり

まし。ヤレハアつらいめに逢ましたアよ。

工あれ程にいふこんだ。よろしてやり

なさろ。皆士べたへ頭のう堀込で。誤

りめさろ／＼。番朝比奈様。眞平よ

ろさつしやりもし。座よくござる。り

やうけんうしますべし。その代に工

藤どの。ちくどばかり頼たい事がござ

るはよ。工あんでも聞ますべし。座そ

様に對面のう仕たがり申す。逢て遣

て呉めさろ。工朝比奈殿待なさろ。會

我兄弟のやつらはおらにはちつとさし

合だ。是はよろしくくれさつしやりも

し。座そりやア詞がちがひ申す。わり

様の云事なア聞かせて。おらが云事なア

きくめへとか。夫じや損徳なしじやア

ござんねへ。そんだらよくござる。又

けんくわのうおはだつべへ。梶原そこ

へ出され。工ア、是きくめへとは云申ス

めへ。なら程逢てやりますべし。座又

嘘言じやアござんねへか。工君子に二

言なしでござるはよ。座待めさろ。おれ

が爰のう退たら。介つね殿が逃べへも

しれ申さない。お身達二人で押へて居

めさろ。トとらせう／＼工藤

ア出しへさへ申た。座どりと二人の

ものを呼出しますべし。ト切まくの方

對面仕へいと云こんだ。早く出て逢めさう。

〔十裏切まくの心得申した。〕

〔五里内より。〕

重といふ所なれど。といふあつらへかきすのめりやすになると。兄弟みの笠にて。十郎は木にてこしらへたる櫓をかたげ。五郎は櫓を裏赤にぬり。兩方へ長く下つた前がみのかづら。竹にてこしらへたる弓矢をもち。花道の真中につゝはり立て。案山子の思入。この見へ大おちにて切落しよりどろどろとかけあがり。十五六。

〔廻會我兄弟なアどのやうなざまだアとおもつたら。〕

苗代の案山子が。道祖神殿のう見るやうな出立だア。あれでも虎少將が知音だげだア。

みんなわらひなさう。

〔ト大口を明て分。〕

〔ト別もなく笑ふ。〕

〔朝そまにたかつた。〕

鳥のう見るやうにやかましくござるは。サア二人のせなごよいふべい事があらばそこ云めさう。

〔トいふ内とことんしきゆへ。東西といへどもしづまらず。それもそのはづおとしの板のうらにせまがとまつてたくなり。後見竹竿を持て来て追ちらす。〕

曾我十郎

守山 平介

同 五郎

内山金三良

かけ合せりふ

〔十夫桃栗三年柿八年。梅は酢とて十八年。五けふ吹かへすあまばしの。かきたくる程肝玉が焼て頬さが赤澤山。十おらが親仁の河津殿。柏が峠で猪狩の。列卒に出られた歸り懸。椎の實取てくふ所を五峰に珍寶さしつめて。放いた矢さがあやまたす十ふんぐり玉なア射かちつて。横簾所へおつ立たア。五疋氣の虫なア音を立て。十ぐうとも五すうとも云はこそ十そのまゝそこで五おもいば。十これ。おもひ懸ない災難で。河津どなアお死にやつた五車前草どの御ともらひ。土牛房を見るごく。穴さ掘て埋込だ。十夫から代と取付の。掃除旦那の頼朝様五今は掃除をすけつね殿。糞附馬のうまノと。人のかぶら染引ッこひて。漬大根込納るげだ十壓のおもたい頬の皮。川津。宇佐美に。久津美の庄。合せて三ヶの庄屋殿。紋の庵にもつこ

うに。さらへ込だる實の山五寶の山へ入ながら。只は歸らぬ介つね殿十親の敵をうつ鐵柄。天びつかりの天ちよこを五てつへんさアへいたさぬ。仇矢は放さぬ此弓矢。腰の骨なアぐつしやりと十立たら大事かそつ首を。五其儘取てとりおとし十まアさう思つてくんされと二人ハ、敬て白ス。

〔朝ヲヤがおつたこんだ。川つかへなしに能クしやべつたア。〕

〔コレ朝比奈殿よ。あんまり鬨さつしやるな。あんだかはや氣味のわるい口上でござる。おらはもふいぎますべい。便氣が付申した。〕

〔虎少なつぼうでもはなし申さな

い。朝ヲ・さうだぞ。もしかけ出いた

ら。禪の下りのう引たが能ぞ。コレ二人

のせなごよ。ちつとも早く爰へ来て對

面のうしろノ。二人吞込申した。さ

らばそこへいぎますべい。ト本舞臺

ヤレ鳥居先へよるな。せつかく掃ちぎ

〔廻〕

居芝會田

344

つてある所が、葉簀はらふのこみになるはよ。

〔朝〕ごみに成てもよくごんさる。すつこ

んで居めさろ。〔工〕そこへねまつた二人の若者わかしやはねまつたと先へ出はつたは何といふ。〔干〕舎兄しやあにの一万いつかく成て。曾

我の十郎祐成と云申ス。〔工〕次に出はつた甘塩あまじしほは。前まへがみ。〔舎〕弟の箱王でつか

く成て。曾我の五郎時宗と云申ス。〔工〕兄祐成はお袋のまんかうに似て。ぼや

らこく。弟の時宗は親仁の川津に似て。岩疊いざな生れ付た。親はなくてもがきつ

子は育とやら。ヘテでかばちなく大さく成たなア。〔三〕介つね殿。〔四〕二人の

若イしよ。〔二〕ハテめづらしい。〔三〕對面だなア。朝何と工藤との久しぶりでの

參會だア。二人のものに盃さかづきのうやつてはおりやり申さぬか。〔五〕盃さかづきなア仕

申さうが。酒のう呑でやだをふんだら。大事だんべい。〔朝〕ソリヤア氣遣きづかいなござ

んねへ。此小林が受合申ス。辛腰さいわいこしへ付

て來た。徳利酒とくりしうがござる。サアくぬしから始めなさろ。ト腰付のびんぼう徳利に

〔工〕そんだら辭義しじぎなしに始はじますすべい。慮り外ぐわいながらついで呉さつしやりましよ。

トちやわんにうけて一口のみ。顔をしがめ。〔朝〕あたまをふりまきうらまきこなしあり。〔朝〕あ

んといふ酒だつべい。自慢じまんではないが。おらが手造りだア。〔工〕ア、いゝ酒

でござる。近頃は不作でどこでも酒は造らないが。いゝたしなみでござり

申ス。祐成さし申さう。〔工〕ト、ト返事をより。竹の子笠たけのこがさをぬぎ。茶ちやわんを受つ。〔工〕時

宗。〔五〕あんだア。〔工〕石いしこきのうさつくれべへ。こゝへねまれ。〔五〕ヲ、ねまる

べい。トつる／＼と來て。茶ちやわんをうけ。三寶さんぼう〔朝〕ヤレハアあきれた肝癪かんさくだア。見物けんぶつヨウく

五郎やつたり／＼。もちつとぎしめけ／＼。とはめる。此所かけ合にて股野

川津角力かづのりもの語りあれど。丁數ていすうの登るをいとひてもらしぬ。〔朝〕時にはや余義よぎをいむしんでござるが。二人の者に着

をはさんではおりやり申すまいか。〔工〕わしもはアさう思ひますが。何も持

合せ申さない。トそこらをよくござる。ト十郎がぬいだ笠を取あげ。片

手には朱さやの山刀やまばなを持。十郎には竹の子笠。五郎には此山刀。是が看だ。つま

まみなさろ。ト二人つかくと思入。〔十五〕ア、是が看だアとか。〔工〕笠がさのうふせればふ

じの山。半夏はんげ過ての竹の子笠。五月の末は駿河の國。富士の裾野の陣屋の内

へ。〔十〕夜這よはは仕付たおらゝが兄弟。簀笠さしかかぶつて忍び込。〔五〕親仁の敵と名乗

懸か。すのこも通れと切り付たら。〔朝〕血はまつかいなさび刀。〔五〕此赤鯉せきりの山刀

で。〔十〕本望とげろといふとか。〔五〕とてもの事だら今爰で。〔朝〕ヤレハアせつ込

事はない。此場このばは別わかれて歸りなさろ。〔二〕人にわかれづらい所だ。せう事がな

い。いぎますすべい。〔朝〕咄はなしが有て來申したが。取紛とれまて云ましない。〔少〕是から内へ歸り道。咄はなししながらいぎますすべい。

〔朝〕サアいゝ道連が出来申した。行道筋

は向ふの田の畔。トいふせりふをきつかげ

たり落ると。見わたし二三里の天地自然の大仕か

け。是は江戸では出来ぬとなり。見ぶつぶちぬ

てほめる。云ッレどこぞいゝむすはたけ麩鳥が有たな

ら。ころけこんだがよくござる。〔虎少

朝比奈さア。朝二人のおしやらく。

〔十五〕介つね殿。〔正〕二人のわかいしよ。

〔普く〕さらばでござり申ス。ト見へわるくならび。

〔正〕先今日は是切でござりもふす。

打出し

右ノ本作者書

捨ノ原本ヲ以

テ。校合一過

セシメテ畢

ヌ。師ハ大象

ノ如ク弟子ハ

猿松ノ如シ。

三本足ラザル

筆ノ毛ヲ採ツ

テ。其脱漏ヲ

補フト爾云フ。

門人 千差萬別
天竺老人

右之本以作者書捨之原本令校
合一過畢師如大象弟子如猿
松採不足三本筆毛補其脱漏
云爾

門人

千差萬別
天竺老人

後序

神代卷曰。天照
世界の親玉速素盞
烏尊の惡晒落を疎
ませ給ひ。大疳癰
の磐戸隠れより以
來。世は闇雲のめ
つた晒落。次第
に増長し。五
月蠅如無駄言を小
冊にさへ書著はし
て。世に行はるゝ
もの八百万卷。何
も似たり寄たりに
して。阿那面白き
趣向もなし。爰に

後序

神代卷曰天照世終に親玉速素盞烏尊の
惡晒落を疎ませ給ひ。大疳癰の磐戸隠
れより以來。世は闇雲のめつた晒落。次
第に増長し。五月蠅如無駄言を小冊に
さへ書著はして。世に行はるゝもの八
百万卷。何も似たり寄たりにして。阿
那面白き趣向もなし。爰に

我師万象亭。銅女うすめめ命みことの昔を思ひ俳優わきならぬ業わざくれは。世間の晒落うらの裏うらを行端出繩しりくめなわの横よこなまれる。夷振ひなぶりの可笑おかし味みにして。天照神に吹出させ。しかも磐戸さしあひの差合さあひなく。笑ふ門には福来る。その福神ふくしの神等かんだらの。員かずに合たる七珍萬寶。七尺さか下しりへつて後に書す。

未のはつ春

俳優はいゆうの業わざくれは。世間の晒落うらの裏うらを行端出繩しりくめなわの横よこなまれる。夷振ひなぶりの可笑おかし味みにして。天照神に吹出させ。しかも磐戸さしあひの差合さあひなく。笑ふ門には福来る。その福神ふくしの神等かんだらの。員かずに合たる七珍萬寶。七尺さか下しりへつて後に書す。

未

はつ春



此小冊は。江戸前
の隠士。萬象亭の
戲作にして今世に
行ふ。晒落本の。
或は妓の耳の垢。
又は娼の臍の脂を
穿鑿仕たるよふ
な。片づんだる物
とは殊なり。通と
なく野夫となく。
一トたひよめば腮
のかきかねをはず
し。數腹すしの
よれて。その可笑

跋
此小冊は。江戸前
の隠士。萬象亭の
戲作にして今世に
行ふ。晒落本の。
或は妓の耳の垢。
又は娼の臍の脂を
穿鑿仕たるよふ
な。片づんだる物
とは殊なり。通と
なく野夫となく。
一トたひよめば腮
のかきかねをはず
し。數腹すしの
よれて。その可笑

さやめとなし。予
 に清書せよとの師
 命に任せ。筆にも
 紙をくらはする。
 未のはつ春。大高
 檀帝の威に押れ
 ず。おめずおくせ
 ず書ちらすは。狐
 めん堂の主人。其
 由をしるして賊と
 はなしぬ。

風來山人之

孫弟子

筆者

狐面堂柳郷印

予の可笑さやちと好し。予小
 清書ちよとの師命に任せ。筆
 紙をくらはする。未のはつ春。
 大高檀帝の威に押れず。おめ
 ずおくせず書ちらすは。狐め
 ん堂の主人。其由をしるして
 賊とはなしぬ。

風來山人之孫弟子

筆者

狐面堂柳郷印